

夏目漱石『心』研究

——静の「沈んだ心」を巡る考察——

一

『心』は「先生の遺書」という題で、夏目漱石によって、大正三年四月二十日から同年八月十一日まで東京・大阪両朝日新聞に掲載された。いわゆる漱石の後期三部作と呼ばれる『彼岸過迄』『行人』に続く作品である。「上 先生と私」「中 両親と私」「下 先生と遺書」の三部から成る。漱石四十八歳、死の二年前の作品である。初出の題が「先生の遺書」であることから、『心』において一番重要な部分は、先生が自分の過去を「私」に遺書という形で伝えるその内容にあるということは窺える。本論文は、語り手である先生や「私」の目線だけでなく、静の目線から考察していくことで、『心』を読み解いていくことを目的とするものである。

静は言うまでもなく、先生と深い関わりを持つ人物であ

前 田 友 美

る。静が『心』の中でどのような役割を果たす人物として描かれているのか、また先生との関係について論じていく。まず、静の「沈んだ心」(上 十六)に注目して述べていく。押野武志氏は静について次のように述べられている。

漱石は、青年・先生・Kには固有名詞を与えず、静には与えた。先生は、Kと乃木將軍の死を模倣し、青年も先生の生き方(死に方)から何かを学ぼうとした。青年の「私」は遺書のなかの先生^(註)「私」に似ている。しかし、静は、何もしない。固有の存在である。

静は確かに先生、K、「私」等の主要な登場人物の中でただ一人、名前を与えられている人物である。さらに押野氏は次のように続けておられる。

乃木將軍の静子夫人のように後追い自殺することなく、どこまでもしたたかに生き続ける。陰気な先生がいなくなつて、先生の遺産で悠々自適に暮らす静を想像したい。

先生の死後に静が「先生の遺産で悠々自適に暮らす」ということに関しては共感し難い点もあるが、静が「恐れない女」であるということと、名前を有することで、一人の固有の人間として『心』の中で浮かび上がってくる存在であるという意見には納得するものである。一方で、秋山公男氏は次のように指摘されている。

奥さんの「策略」及び御嬢さんの「技巧」は、無論先生の叔父によつて企まれた悪辣な奸計に比較すれば罪の軽いものであるが、等しく我執に基盤を有するこゝとに変わりはない。我執の物語『こゝろ』の登場人物の一人として、御嬢さんもまた我執と無縁ではあり得なかつたといふべきであらう。

また石原千秋氏は「策略家」としての御嬢さん（静）と奥さん（その母）という見方はようやく定説になりつつ

ある」と言及されている。

しかし、石原氏が述べられているように、静が「策略」を張り巡らしたことによつて、自分の罪を自覚しているならば、先生の苦悩にも気づくはずなのではないか。先生の変化の原因を話し合う場面で、静はKの自殺について次のように「私」に語っている。

「實は私すこし思ひ中ることがあるんですけれども……」（中略）

「え、もしそれが原因だとすれば、私の責任丈はなくなるんだから、夫丈でも私大變樂になれるんですが、……」（中略）

「何故其方が死んだのか、私には解らないの。先生にも恐らく解つてゐないでせう。けれども夫から先生が變つて来たと思へば、さう思はれない事もないのよ。」

（中略）

「然し人間は親友を一人亡くした丈で、そんなに變化できるものでせうか。私はそれが知りたくつて堪らないんです。」（上 十九）

静には『心』全体を通して、用意されている言葉があま

り多くはない。その中で敢えて静にこのように言わせるのは、先生の過去の出来事の伏線の役割を果たす以上に、静が本当に、過去の真実を知ることではなく、その心が誠実であるということを証明するためではないだろうか。静の無意識の技巧ともいべき「笑い」が、学生時代の先生の不快感を煽る結果になつていても、それは先生への恋に起因しているため、罪のある行為だと言ふことはできないと考えられる。静を「無意識な偽善家」と呼んだのは寺田健氏である。

漱石が「文学雑話」の中で使つてゐる「無意識な偽善家」なる語については、様々な解釈があるが、私は漱石がその語にすぐ引き続いて、「其の巧言令色が、努めてするのではなく、殆ど無意識に天性の発露のまゝ、で男を摘にする所」と説明していることを重視したい。すなわち私は、この語は、女性が恋愛行動において無意識的にとる虚偽的な態度をいうが、「男を摘に」しようとする「嬌態」はその典型的な在り方と捉えられてゐる、と考へる。

寺田氏は、静の笑いは無意識であると指摘されており、

私も同意するものである。静の人物像について、相原和邦氏は次のように言及されている。

「恋は神聖」という先生のもう一方の恋愛観や、さらに妻を「純白に保存して置いて置きたい」という愛情の真実も疑えないが、先生自身「塵に汚れ」るのが避けられない人生の姿であることを熟知しており、かつ、眼前の静に対して先に見たような不信の影を拭い切れないのが事実であつてみれば、妻のみを「純白に保存して置」くという願望はやはり願望にとどまる観念的な妻の座の掌握にならざるを得ない。静の姿が具体的に書き込まれることが少なく、「美しくしい」いい奥さんというだけの抽象的な存在になつた根本的な原因は、ここにあると思われる。

(中略)

要するに、先生は妻との人間的な理解と連帯を願ひ、もう一步というところまで接近しながら、その可能性を切り拓くことができず、「世の中にたつた一人住んでゐる」孤独感の中に立ちすくんでゐる。もう一步のところでは、孤独の淵にたたずまざるを得ないこの先生の姿は、「仕切の襖」に手をかけながらついに語りかけ得な

かつたKの姿と重なっているのである。さらに、もう一步という語りかけの可能性を閉ざしたのは、肯定的契機としては「純白」の愛の願望、否定的契機としては不信感をも交えた女性観であり、いずれもきわめて明治的な自己抑制と言えよう。^(注6)

相原氏は、先生が静を観念的に捉えていたがために、このような静の人物像が浮かびあがるとされている。相原氏は、静は抽象的な「妻」としての存在でしかない指摘されているが、その一方で静は「私」に次のように語っていることに注目したい。

「あなたは學問をする方丈あつて、中々御上手ね。空っぽな理屈を使ひこなすことが。世の中が嫌ひになつたから、私迄も嫌ひになつたんだとも云はれるぢやありませんか。それと同じ理屈で」

(中略)

「議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白さうに。空の盃でよくあゝ倦きずに猷酬が出来ると思ひますわ」

奥さんの言葉は少し手痛かつた。然し其言葉の耳障

からいふと、決して猛烈なものではなかつた。自分に頭腦のある事を相手に認めさせて、そこに一種の誇りを見出す程に奥さんは現代的でなかつた。奥さんはそれよりもつと底の方に沈んだ心を大事にしてゐるらしく見えた。(上 十六)

静の「よく男の方は議論だけなさるのね」という言葉が、誰のことを念頭に言っているのかはつきりしないところはあるが、静は父も既に亡くしており、異性の会話を聞く機会といへば、自然、娘時代に限られるのではないか。実際の経験のように語っているとところから、かつての先生とKの会話のことを思い浮かべて言っているのではないかと考えられる。男たちが「空の盃」で議論することよりも、自分の「底の方に沈んだ心」を大事にしている静は、本当はこの『心』の中で、誰よりも自分というものが判っている存在として描かれているのではないだろうか。議論だけが飛び交う会話よりも、先生とKが、築き、継続していくことが出来なかつた温かい関係を希求し、大事に思っているのではないだろうか。静の「空の盃」という言葉は先生やKへの痛烈な批判ともとることが出来る。むしろ近代的な高等教育を受けた男性全体への婉曲な抗議としても読み取

ることができないのではないだろうか。^(注7)

静は自分の「沈んだ心」を大事にして、それを誰かに悟らせることをしない。その点から、長い遺書によって、「私」に自分の過去の罪を露わにした先生との相違を読み取ることも可能なのではないだろうか。「心」における静の独自性を強く表すのが、この「沈んだ心」なのではないかと考えられるのである。漱石は静の心を見事に表現していると考えられる。

静は「私」に対して次のように語っている。

「私はとうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく云つて下さい、改められる缺點なら改めるからつて、すると先生は、御前に缺點なんかありやしない、缺點はおれの方にある丈だと云ふんです。さう云はれると、私悲しくなつて仕様がななんです。涙が出て猶の事自分の悪い所が聞きたくなるんです」

奥さんは眼の中に涙を一杯溜めた。(上 十八)

静が常に真摯に先生に働きかけていたことが前掲した箇所から窺える。静がそのように訴える度に、先生はどうし

ような悲しみに襲われることになる。先生は静をどのような存在として受けとめていたのだろうか。岩上順一氏は次のように指摘されている。

漱石は先生の妻を近代人の世界には無縁な「純白な」ものとし、近代とは別の世界の人間としたがつてい^(注8)る。

さらに岩上氏は次のように言及されている。

漱石は彼女もまた先生に劣らぬ近代性をそなえた女であり、すくなくとも先生とおなじく、どのように醜悪で汚れた自我であろうと、その自我のありのままの真実において生きようとのぞむ女であったとしているのである。先生は妻がそのような女であることを知っていた。それを知つていながら、先生は「私はたゞ妻の記憶に暗黒な一点を印するに忍びなかつたから打ち明けなかつたのです。純白なものに一筆の印氣でも容赦なく振り掛けるのは、私にとつて大變な苦痛だつた」と言つて、妻を無垢天真な別世界のもの扱いにしていった。(中略)「私は妻には何にも知らせたくないの

です」といって、妻を別世界に置こうとしているのである。(中略)漱石は先生にその妻を天使あつかいさせたりで、その天使あつかいが妻への深い不信蔑視であることに気づかせていない。^(註10)

「純白」という言葉は、岩上氏の言われるように、静を先生から遠ざけるものであろうか。先生はそこまで静に対して偶像を抱いたままであったのだろうか。一方「純白」という言葉から先生の別の心情も読み取れるとされたのは酒井英行氏である。

細君を「純白」なままに保ちたいという願いは、なによりも、もはや自分が「純白」ではありえないという、痛切な喪失感・悔恨に基づいているのだ。「記憶して下さい、あなたの知つてゐる私は塵に汚れた後の私です。」(下九)という悲しみ、喪失感を秘めているのだ。(中略)この悲しい喪失感があるからこそ、「然しまた何うかして、もう一度あゝいふ生れたままの姿に立ち帰つて生きて見たいといふ心持も起るのです。」(下九)といった「純白」(生れたままの姿)への回生の希求も強いのだ。だから、愛する細君だけは「純白」

のままであらせたいと願うのだ。^(註10)

先生は、既に「純白」ではいられなくなった自分の姿を顧みて、静だけは自分と違ふところに置きたかつたのだと酒井氏は述べておられる。

先生は美しい戀愛の裏に恐ろしい悲劇を持つてゐた。そうして其悲劇が何んなに見惨なものであるかは相手の奥さんに丸で知れていなかつた。奥さんは今でもそれを知らずにゐる。(上 十二)

前掲した「私」の言葉からは、静が今でも先生の死の理由を知らずにいることが読み取れる。先生が願つた静の「純白」は守られ、先生が遺書の最後に「私」とした約束は履行されている。

自分の死んだ後であつても、Kとの過去を静にだけは知られてはならないという先生の徹底した気持ちは、「人間の為」(下 五十三)という広義の思いやりだけに留まらぬ、一人の人間としての強い気持ちが感じられる。先生は静に生涯自分の過去を隠し続けることで、その愛情を示したのである。しかしそれと同時に次のような問題点も浮き彫り

になる。「心」における最大のエゴイズムの表れは、先生が静に過去を告白せずに独りで死んでいったことにあるのではないだろうか。静は、「私」よりも余程強く、先生の変化の理由を「知りたくつて堪らない」（下 十九）と願いながら、それが叶うことはなかった。先生は静に「頓死したと思はれたい」（下 五十六）のであって、自殺だと判るような死に方をするつもりはない。その遺書は「私」宛てであり、決して妻に知らせないように、と釘までささされているのである。先生の死の理由に気づけなのまま、たった一人で残される静の結末は、やはり淋しいものである。そして、そのような結末を迎えざるを得なかったのは、先生の静に対するエゴイズムが愛情と表裏一体のものであったためではないだろうか。^(注1)

妻はある時、男の心と女の心とは何うしてもびたりと一つになれないものだらうかと云ひました。私はたゞ若い時ならなれるだらうと曖昧な返事をして置きました。妻は自分の過去を振り返つて眺めてゐるやうでしたが、やがて微かな溜息を洩らしました。（下 五十

三）

この遣り取りは、とどめとも言ふべき、互にとつて残酷な応酬である。静にとつて、過去にも現在にも、先生と心が「びたりと一つ」になれた経験がなかったことが「微かな溜息」から伝わってくる。先生はこの時分から、自殺へと向かう「物凄い閃めき」（下 五十三）を感じるようになっていく。

二

静は「静」という固有名詞の他に、先生の書生時代には「御嬢さん」と呼ばれ、先生の妻になった時には「奥さん」と呼ばれている。先生の間接話法という形で語られる、過去の「御嬢さん」の静の姿は、「私」と相對する「奥さん」の姿と大きく異なっている。

先生は書生時代に、御嬢さんとKの仲を疑い、嫉妬の念に苛まれた。奥さんがかつて自分の財産を誤魔化し裏切った叔父と同じような目的で御嬢さんを自分に接近させようとしているのではないかと疑う。御嬢さんに対し先生は次のように感じている。

私の煩悶は、奥さんと同じやうにお嬢さんも策略家ではなからうかといふ疑問に會つて始めて起るのです。

二人が私の背後で打ち合せをした上、萬事を遣つてゐるのだらうと思ふと、私は急に苦しくつて堪らなくなるのです。(中略)それでゐて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑はなかつたのです。(下 十五)

このような書生時代の先生と同じ状態になつてしまつたのは、先生の奥さんとなつた時の静の心情である。先生への日々の思いを打ち明ける際の静の様子を、「私」は次のように言っている。

疑ひの塊りを其日／＼の情合で包んで、そつと胸の奥に仕舞つて置いた奥さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた。(上 十九)

「疑ひの塊り」を胸に仕舞い込んでゐる静は、書生時代の先生の状態と重なつてゐるのである。「妻が私を誤解するのです。それを誤解だと云つて聞かせても承知しないのです」(上 九)という先生の言葉からも察することができるように、先生が自分を愛してゐないのではないかと思ひ込み、苦しんでゐる。

静が「私」に微笑を見せる、次の場面について考察して

みたい。先生が世の中に出て活動しない原因を考える場面で、静は先生を心配しながら、微笑を湛へている。

奥さんの語気には非常に同情があつた。それでも口元丈には微笑が見えた。外側から云へば、私の方が寧ろ眞面目だつた。(上 十二)

ここでの「微笑」が本心からの笑いであるか、本心からの笑いではないのかという疑問が生じるが、のちに静が「疑ひの塊り」(上 十九)を抱えていることが解るので、この微笑は本心を隠して笑つてゐることが推測できる。

静の、ただ先生へ恋心を抱いてゐるだけでよかつた娘時代の頃の笑いと、先生の細君となつてからの笑いは種類の異なつたものである。静は、「私は妻のために、命を引きずつて世の中を歩いてゐたやうなもの」(下 五十四)とまで語つた先生の苦惱に気づきながらも、その原因が解らずに、自分では先生を救えないことを悲しんでゐる。細君となつた静が夫である先生に笑いかける描写はあまり見られない。先生が変化しただけでなく、自分までも変化したことに静も気づいてゐる。「妻は自分の過去を振り返つて眺めてゐるやうでしたが、やがて微かな溜息を洩らしました」

(下 五十二) という言葉からも、自身の変化を感じ取っていることがわかる。米田利昭氏は次のように指摘されている。

誰もが不思議に思う『こゝろ』の静かな文体、何かあるぞと思わせる異常に緊張したあの静かさは、運命によつて罪を負わされた男の悲しみよりも、〈純白〉の「まま群集の中にとじこめられた妻の悲しみに応じている」^(注12)

漱石は、書生時代の先生の静への疑念を、妻となった静の先生への疑いへと代えて反復させている。先生は自殺することによつて静との訣別を自分で選択することを可能にした。しかし後に残されたと想像される静の姿は、米田氏の言われる通り、あまりに淋しいものである。静は御嬢さんでいられた頃の自分と訣別し、先生の細君となった今の自分と必死に向き合おうとしているのである。「Kさんが生きてゐたら、貴方もそんなにはならなかつたでせう」(下五十二)と投げかける静に、Kとの過去を話し、「理解させる手段があるのに、理解させる勇氣が出せない」(同)先生は詫びることしかできない。

私は時々妻に詫まりました。それは多く酒に酔つて遅く歸つた翌日の朝でした。妻は笑ひました。或は黙つてゐました。たまにぼろ／＼と涙を落すこともありました。(下 五十三)

先生の奥さんとなった静の笑いの背景には何時も悲しみがあつた。そこでは先生に好意を持つゆえに起つていた娘時代の笑いは影を潜め、生身の姿で先生へと直接に果敢に疑問を投げかけ、答えを得られず、傷つき、愛されたいと願う一人の女性の姿が浮き彫りになつてゐる。先生の遺書に記された、静の最後の笑いは、明治天皇の崩御の報せを先生が受け取る場面に見られる。

最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白さまに妻にさう云ひました。妻は笑つて取り合ひませんでした。何を思つたものか、突然私に、では殉死でもした可からうと調戲ひました。(下 五十四)

皮肉にも、『心』に描かれた、静の最後の笑顔の言葉を受

けて、ついに先生は死を実行に移すのである。

これまで静の変化について述べてきたが、静が過去にも現在においても、先生を愛していたことには変わらない。

静の愛が一途であればあるほど、Kの面影に苦しめられる先生は、次第に居場所をなくしていく。先生は自分自身の中に苦しみの原因を発見したために、静に伝えて、楽になることができない。

夫婦の姿が描かれている作品のうち、『門』と『道草』を例にとつて夫婦の形を見てみる。『門』においては共通の罪による苦しみを抱えながらも、全てを分かち合うことのできない夫婦の姿が描かれている。宗助はお米に安井がすぐ側まで接近している事実を最後まで伝えることができない。『道草』の御住の、夫である健三へと向けた「あなたも誰も何にもしないのに、自分一人で苦しんでゐらつしやるんだから仕方がない」(二十一)という言葉は、先生とKの過去を知らない静にとつては、先生に対しての同じ心境を表すものと言えるだろう。健三と御住の間には喧嘩の描写が多い。しかし『道草』では次のような文章も見られる。

離ればいくら親しくつても大切になる代りに、一所

にゐさへされれば、たとひ敵同士でも何うにか斯うにかなるものだ。つまりそれが人間なんだらう。(六十五)

この健三の言葉から、『心』とは夫婦の有り様の捉え方が変わっていることに気が付く。『道草』は、漱石の自叙伝的な作品である。主人公健三は、己の暗い過去と対面し、それを事実として受けとめて日常を生きていく。健三と御住が見つめるものは最後の場面で交差することはない。しかしそれでも二人の日常が断絶することはなく、先生の死によつて未来を絶たれてしまった『心』の夫婦とは異なつた、未来への継続が描かれている。

三

再び、『心』に視点を戻す。静は先生を愛している。だからこそ先生にとつて静を愛することは、生の方向へ自らの足を向かわせることだった。先生が「実は奥さんに何もかも期待していなかつた」とされたのは熊坂敦子氏だが、本当にそのように言い切ることは可能なのだろうか。静の愛は先生に何の影響も与えないものだったのか。江藤淳氏は次のように述べておられる。

小宮豊隆氏をはじめ、多くの優れた注釈家や伝記作者の熱心な努力にもかかわらず、「心」、「道草」、「明暗」の三つの作品を通じて、漱石は明らかに「愛」の可能性を探索するより、その不可能性を立証しようとしている。⁽¹³⁾

江藤氏の言われていることは『心』という作品の結末から見ると確かに首肯できるものであるが、「漱石が明らかに愛の不可能性を立証しようとした」という箇所に気になる点がある。

先生と静は、『行人』の一郎と直にみられるような見合い結婚ではなく、お互いが好意を持つたうえの結婚であることから、恋愛結婚の形に近いと思われる。先生が下宿に来た当初、上手ではないけれど、静は琴を奏でて聴かせ、先生の部屋の床を色々の花で飾ってみせている。それに対し、先生は次のように感じている。

私は喜んで此下手な活花を眺めてはまづさうな琴の音に耳を傾けました。(下 十二)

静の作法が完璧であったなら、先生はここまで喜ばな

かったであろう。この場面には、静の、娘らしい、誠実な不器用さと、それに対し、至極自然に安らぎを感じている先生の姿が、はっきりと描かれている。静もまた、先生に喜んでもらいたかったのである。静は先生に好意を示し、それに先生は応えている。「頑なだった先生の心を、ほぐしたのもやはり静だったのである。打算も何もない、先生に対する静の愛情が描かれている場面であるといえるだろう。先生が愛の可能性を模索している様子は十分に描かれているのではないだろうか。先生は「私」に「とにかく戀は罪悪ですよ、よござんすか。さうして神聖なものですよ」(上十三)と語りかけている。また、遺書を書いている現在でも、先生は、「私は今でも固く信じてゐるのです。本當の愛は宗教心とさう違つたものでないといふ事を固く信じてゐるのです。」(下 十四)と「本當の愛」を尊いものと捉えていることが窺える。この点から、先生が、本當の恋愛を神聖なものとして読取れ、その考えは一貫して変わらないことがわかる。

先生の叔父が自分の娘と先生との結婚を勧めた時に、先生は次の理由で断っている。

従妹は泣きました。私に添はれないから悲しいのでは

ありません。結婚の申し込を拒絶されたのが、女として辛かつたからです。私が従妹を愛してゐない如く、従妹も私を愛してゐない事は、私にもよく知れてゐました。(下 六)

また、先生は次のようにも言っている。

此方でいくら思つても、向ふが内心他の人に愛の眼を注いでゐるならば、私はそんな女と一所になるのは厭なのです。(下 三十四)

男女の間に愛情がなければ、結婚をすることはできない、と先生が考えていることが分かる。しかし、先生がKを出し抜こうとして、奥さんに静との結婚を申し込んだことも紛れない事実である。それは自分が静に好意を持たれてゐるといふ実感がなのままの行動であつた。静に対して次のように思つてゐたのにも関わらずである。

私は其人に對して、殆ど信仰に近い愛を有つてゐたのです。(中略)もし愛といふ不可思議なものが両端にあつて、其高い端には神聖な感じが働いて、低い端には

神聖な感じが動いてゐるとすれば、私の愛はたしかに其高い極點を捕まへたものです。(下 十四)

静に恋する気持ちに對して、「信仰」や「神聖」という言葉を用い、結婚に對して慎重であつた先生が、Kへの嫉妬に起因して行動を移したことが、修復不可能な亀裂を起したのである。

『心』を一読した後には、鮮やかに残る印象は、書生時代のKと先生の葛藤の姿であり、そこに静の面影はなかなか浮かんでこない。静は、理想的な妻として、『心』に描かれている女性である。本来なら幸福になれるはずであつた静が、先生に先に逝かれた後、味わう淋しさは描かれていない。漱石は意図的に回避したのであるうか。『心』は「私」の手記と、先生の遺書で構成されており、静の姿は、先生や「私」によつて、間接的に語られるのみであり、静の視点での文章は見られない。

「沈んだ心」(上 十六)を誰にも吐露しなかつた静の心情は想像のなかにのみ存在する。漱石は、静の悲しみをはつきりと描かないことによつて、その悲しみをより強く浮かび上がらせてゐる。

注

(注1) 押野武志「『こゝろ』静は果たして知っていたのか」(『ア
エラムック』(AERAMOOK) 41号 朝日新聞社 平成10・9
71頁)

(注2) 押野武志氏は(注1)で挙げた「『こゝろ』静は果たして
知っていたのか」の論文において、「漱石はよく『恐れる男』
と『恐れない女』の対比を描いたが、静もその恐れない女の系
譜にある」と述べておられる。「恐れない女」は『彼岸過迄』
の、須永が千代子を形容する言葉として登場する。

僕は自分と千代子を比較する毎に、必ず恐れない女と恐
れる男といふ言葉を繰り返したくなる。(中略)彼女は僕の知
つてゐる人間のうちで最も恐れない一人である。だから恐
れる僕を軽蔑するのである。(須永の話 十二)

(注3) 秋山公男「『こゝろ』の死と倫理——我執との相関——」
(秋山公男著『漱石文学論考——後期作品の方法と構造——』
桜楓社 昭和62・11 234頁)

(注4) 石原千秋「『こゝろ』のオイディプス——反転する語り」
(石原千秋著『反転する漱石』青土社 平成9・11 198頁)

(注5) 寺田健「読む お嬢さんの笑い——漱石『こゝろ』の
一視点——」(『日本文学』29巻7号 日本文学協会 昭和55・
7 65頁)

(注6) 相原和邦「補説——『こゝろ』の人物像」(相原和邦著『漱
石文学の研究——表現を軸として——』明治書院 昭和63・2
452頁・453頁)

(注7) この場面での、静の「空の盃」(上 十六)という発言は、
先生とKにだけでなく、「私」にも向けられているということ
を補足しておく。

(注8) 岩上順「『こゝろ』(岩上順)著『漱石入門』中央公論社
昭和34・12 176頁)

(注9) (注8)に同じ178頁

(注10) 酒井英行「『こゝろ』——『先生』への疑念——」(酒井英
行著『漱石 その陰翳』有精堂 平成2・4 261頁)

(注11) 先生は「人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、そ
れでゐて自分の懐に入らうとするものを、手をひろげて抱き締
める事の出来ない人」(上 六)なのであり、その対象となる
人物は静であり、「私」であり、静に自分の過去を打ち明けな
かったという事実と呼応しているのではないだろうか。

(注12) 米田利昭「挑戦としての失敗作——『こゝろ』」(米田利昭
著『わたしの漱石』勁草書房 平成2・8 242頁)

(注13) 『道草』の末尾は次のようになっていた。

「まだ中々片付きやしないよ」
「何うして」

「片付いたのは上部丈ぢやないか。だから御前は形式
張つた女だといふんだ」

細君の顔には不審と反抗の色が見えた。

「ぢや何うすれば本當に片付くんです」

「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない。一
遍起つた事は何時迄も続くのさ。たゞ色々な形に変わる

から他にも自分にも解らなくなる丈の事さ」

健三の口調は吐き出す様に苦々しかつた。細君は黙つて赤ん坊を抱き上げた。

「お、好い子だ〜。御父さまの仰やる事は何だかちつとも分りやしないわね」

細君は斯う云ひ云ひ、幾度か赤い頬に接吻した。

〔道草〕百二

『道草』の末尾は、夫婦の視線が交わらない点において、『門』の末尾との共通点も窺えるが、この点の考察は、次回の論文の研究課題としたい。

(注14) 熊坂敦子「『こゝろ』の世界」(熊坂敦子著『夏目漱石の研究』桜楓社 昭和48・3 178頁)

(注15) 江藤淳「心」——所謂「漱石の微笑」

(江藤淳著『決定版夏目漱石』新潮社 昭和49・11 120頁)